

「震災を乗り越えて——世界とつながる——」2012年度事業を終えて

2012年度に実施した事業について、事業を終えた後の関係者の声やまわりの反応、新たな動きのいくつかを紹介します。

仙台フィルはロシア公演を終えて

2013年4月、凱旋演奏会を地元仙台で開催。チケットは事前に完売し、演奏会は満席となり、多くの市民がロシア公演の成功を喜んだ。楽団の今後への期待の高まりが感じられた。



「活動の姿勢がよりたくましくなった。帰国後過酷なスケジュールが続いてるが実に前向きだ」(仙台市関係者)

「オーケストラの音が以前より力強くなった。ロシアで演奏し、自分達の音に自信をもてるようになった」(仙台フィル楽団員)

「帰国後の定期演奏会ではロシア公演の映像を流し、仙台駅や街の中心部での演奏のときもロシア公演の写真を展示するなど報告に努めている。市民の人達からは仙台フィルを誇りに思うなど多くの好意的な反応が寄せられている」(仙台フィル楽団関係者)

「私達は食べ物をつくることは出来ない。家を建てることも出来ない。でも傷ついた人の心を癒すことが出来る。これからもこうした活動を続けたい」(仙台フィル楽団員)

宮城牡蠣料理欧州巡回の後、

宮城県塩竈市で、参加したメンバーから浦戸地区の漁業協同組合ほか関係者への報告会が行われた。



「これまで牡蠣生産者は“牡蠣がキロあたりいくらで売れるか”という産業としての視点しかもっていなかったが、世界と接点をもつことにより、地元の牡蠣の養殖やその調理方法が文化であるとの認識をもつことができた」(報告会参加者)

「宮城の牡蠣の“種牡蠣”は、フランスやカナダに輸出されていることは知っていたが、このような機会を通じて海外の牡蠣生産者の顔が見えたり、海外でも宮城の牡蠣をちゃんと認識してくれていることを知り、自分達も向こうの生産者と交流しようという機運が生まれた」(報告会参加者)

「浦戸漁協は、いま復旧から復興へのステージに入った。そんな折に漁協関係者が海外に派遣されたことは大きな励みとなった。欧州各地で宮城の牡蠣が歓迎されたことを、大変嬉しく思う」(報告会参加者)

奥州金津流獅子躍英国公演の

メンバーは、帰国後の2012年10月、岩手県奥州市での報告会で、奥州市議会議員や市の教育委員会担当者などに対して英国公演について報告した。

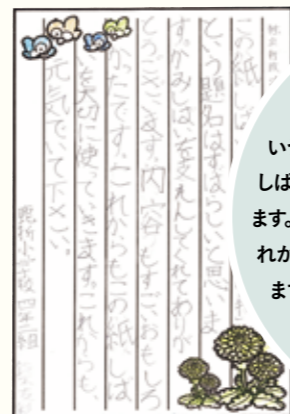


「被災地で受け継がれる文化を多くの人に見てもらえたことに大きな意義を感じる」(保存会メンバー)

「海外公演はこれまでも何度か実施しているが、英国でさまざまな人びとから熱い賞賛が寄せられたことが公演団の励みになった」(保存会メンバー)

日仏共同制作で完成した紙芝居は

気仙沼市の小学校にも寄贈された。2013年8月、紙芝居を見た小学生から手紙が届いた。



「この紙しばいは『気仙沼の宝物』という題名はすばらしいと思います。かみしばいを支えんしてくれてありがとうございます。内容もすごいおもしろかったです。これからもこの紙しばいを大切に使い続けます。これからも元気でいて下さい。」(寄贈先の鹿折小学校4年生の生徒の感想文)

宮城—ニューオリンズ青少年ジャズ交流で、

米国の高校生達が来日した翌年の2013年8月には、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」がニューオリンズを訪れ、現地の中学生・高校生と交流。ジャズの祭典「サッチモ祭」に出演した。



2点とも©Daniel Erath

「ニューオリンズを見て、私達も故郷を大事にしたと感じた」「カトリーナで被災した場所も着々と復興が進んでいて、ハリケーンに備えた家や街並になっていた」「町を歩いていると、“テレビで見たよ”とか“演奏上手だったよ”と話しかけてくれる人がたくさんいて本当に嬉しかった。感謝の気持が行く前より増えました」「いろいろな人が“Oh!スウィング・ドルフィンズ”って言うので、すごく嬉しかった。たくさんの方が応援してくれているんだなあと感じた」(上記すべて、ニューオリンズを訪問したスウィング・ドルフィンズメンバー)

南三陸—チリ青少年音楽・詩作交流の

プロジェクトが女優の吉永小百合さんの目にとまり、2013年5月、吉永さんがパーソナリティを務めるラジオ番組で志津川高校の生徒たちの詩や歌が紹介された。また、この事業を知った、日本有数の拡声器メーカーが、チリとインドネシアの被災地に防災用拡声器を寄贈。ケコ・ユンゲさんには復興大臣より感謝状が贈られた。



「ボランティアの人がどれだけ話を聞いてくれても、テレビでニュースキャスターがどれだけ同情の涙を流しても、実際被災した人間の気持ちは分からないと思う。でも、チリと志津川の被災した人同士で話をすれば、お互い分かり合える。遠いチリで同じような経験をし、同じ思いをしている人がいると知って、勇気をもらいました。今度は私がいろいろな人に勇気を与えたいです」(志津川高校2年4組の生徒)

「コンサートに来た南三陸町の知人が、高校生の言葉に触発されて、もっとも言葉にした対話が必要だと改めて強く思った、と感動したようすで伝えてくれた。胸の奥にある想いを言語化してゆく作業は、精神の開放にも繋がると感じている。ひとりひとりの心の復興の時間軸の違いもあるだろうし、感じ方や表現の仕方は違おうだろうが、あきらめずに続けて行くことが大切だろう」(日智交流コンサートで志津川高校の生徒達の詩を朗読した仙台市在住の朗読家)

ノルウェー・スコットランド アーティストの喜多方滞在制作で

アーティストは各自のブログで滞在についての発信を続けた。アーティストが帰国した後の2013年6月、スコットランドで喜多方滞在の成果を盛り込んだ個展が開催され、さらにアートプロジェクト「精神のく北へ」vol.1 記録集がつけられた。(以下のコメントは記録集より一部抜粋)



「3.11による困難をまだ抱えており、被災者の方々が新たな暮らしに向けて定住ができない状態であるけれども、核汚染の危険性は喜多方エリア内ではそれほど深刻ではないということを通して見て来た。私はスコットランドの人びとに、この事を伝えようと思っている」(スー・グリアスン)

「風景、手工芸、建築、伝統と知識は、建築家としてだけでなく、人間としての私を深く感動させ続けた。(略) 福島の人びとにとって万事が良くなるように祈り、そして私が見たことを人びとと話あうことが出来るように願っている」(マルグレーテ・オース)

「私は、深遠な文化のなかにゆっくりともぐりこみ、私の皮膚の下にゆっくりと取り込んでいった。(略) 会津地方は今、私の心の真珠となり、またいつか戻って来ることを切望する、心に留める地となった」(ヴィグディス・ハウグトロ)